夢物語

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢物語

【Ｎコード】
Ｎ６９０４Ｕ

【作者名】
桜桃

【あらすじ】
『Ｌｏｖｅ　ｎｏｔ　ｓｕｉｔａｂｌｅ』
の番外編です。
最初に本編を読んでからのほうがわかりやすいです。

時は小学校５年生のときまでさかのぼる。
どうして百合亜は新一を好きになったのか？
どうして桜子は死んだのか？
その真実が今、明らかになる・・・。

Ｏｎｅ～初めての親友

絶対、あの人と一緒になる。
絶対、あの人と結婚する。
絶対、あの人のお嫁さんになる。

私はそう決めた。

これが、小学校５年生の百合亜の決断だった。

「百合亜、今日はお花のお稽古だろう。
早く支度をなさい。」

「はぁい！お父様！」

健気に笑う百合亜。

「百合亜、がんばってね。」

「はい！」

ピンポーンッ

「はい。」

「桜子です。
百合亜ちゃんをむかえに来ました。」

「あら、桜子ちゃん。ちょっと待っててね。
百合亜ー！桜子ちゃんがもう来たわよ。」

「はぁいっじゃ、行ってきます！
行きましょっ桜子っ！」

「あーん、待ってよ！百合亜ちゃん！」

南桜子。

百合亜の親友。

百合亜と同じ地主の娘で
容姿は西洋人形のような美少女。
ハーフらしい。
髪はくるんとした巻き毛。

「百合亜ちゃん、一緒に頑張ろうね。」
「うんっ」

東城百合亜。
桜子がはじめての親友だった・・・

Ｏｎｅ～初めての親友（後書き）

こんばんわ。
連載を４つもつくるという馬鹿な桜桃です。
しかし、生徒会の日常は短編集なので・・・
きっと大丈夫だろうと思われます（笑）

これからも、宜しくお願いします。
『恋』～ＨＡＰＰＹ×ＨＡＰＰＹ～
初恋はレモンの味
も宜しくです。

桜桃

Ｔｗｏ～第２の親友

「ちょっと、南さん？
あなた、最近生意気よ！」

「そうよ！
いろんな賞をとっていい気になってるかもしれないでしょうけど！？」

桜子の周りをかこむ。

桜子は器用で何でもできてしまう。

そのため、賞やプロに褒められたり、テレビに出たり・・・

そんな桜子を恨めしく思っているのだ。

「そ、そんなこと・・・」

「いーい？あんまり生意気な口をたたくと、あとで痛い目にあうのはあなたなのよ？南さん。」

バンッ

机をたたく音がする。

みんなは反射的に音のなるほうへ顔を向ける。

「あなたたち結局は南さんがうらやましいんでしょ？」

「は、はぁ！？」

「羨ましいなら羨ましいでいいじゃない。
美人で優しくて何でもできる貴方が羨ましいってね。」

「な、なんなのよ・・・！」

「中谷真琴。
私、今度の生徒会役員選挙に出るので。よろしく。」

にっこりと笑う。

「あたしは桃屋仁衣菜！よろしく。」

こちらも笑う。

女子軍はなにも言えず、そのまま去っていった。

「あなたもあなたよ。
あんなにオドオドしていたら、あっちはつけあがるんだから。」
「そうそう、もっと堂々としてなよ、
あんた美人なんだからさ。もっと自分に自身もって。」
「美人・・・？わ、私そんな・・・」
「東城さんと南さん、すごいコンビだって噂よ？」
「え・・・」

桜子はどうしたらいいのかアワフタする。

「くすっ南さん、貴方って面白いね。
改めて紹介するわ。私は西谷真琴。真琴でいいから。」
「あたしは桃屋仁衣菜！私も仁衣菜でいいから。」
「じ、じゃあ、私も桜子で！よろしく、真琴ちゃん、仁衣菜ちゃん。
」
儚げに笑う桜子
「桜子・・・？」

「百合亜ちゃんっ！紹介するね、こちら西谷真琴ちゃんと桃屋仁衣菜ちゃん。
こちらは私の親友の東城百合亜ちゃん。」

「よろしく。私は真琴でかまわないから。」

「あたしも仁衣菜で！！」

「私も、百合亜で大丈夫ですわ。
よろしく、真琴、仁衣菜。」

すぐに打ち解けた。

西谷真琴、桃屋仁衣菜。

この２人は百合亜の第２の親友。

Ｔｗｏ～第２の親友（後書き）

あの時はまだ、可愛かった百合亜・・・（笑）

Ｔｈｒｅｅ～恋ってなあに？

「桜子！あなた、好きな男いないの？」

「えっ、スキって・・・私は・・・」

「うじうじしないの！
いーい？桜子は美人なんだから！
彼氏の１人や２人・・・・・、いたっておかしくないのよ！？」

「ゆ、百合亜ちゃ～ん・・・」

「私がいい男を捜してあげる！来なさい、桜子！！」

強く桜子の腕を引っ張った。

「きゃっ」

「ストーップ！
いい加減にしなさいよ？百合亜。」

「真琴っ！」

「男なんて必要ないの。

特に桜子にはね。男子恐怖症なんだから。」

「えぇ！必要ないって堅いなぁ真琴は！」

「仁衣菜？」

「あたしは断然百合亜の意見に賛成！
桜子には男が必要だとあたしは思うわけ。」

仁衣菜は百合亜の肩に手を置く。

「それにー、桜子は美人なんだから少しくらい遊びでも良いって！」

「に～い～な～！？」

「な、なに？真琴・・・そんな恐い顔して
驚き、桃の木、りんご・・・」

「黙ってなさい。」

「ハイ・・・」

仁衣菜は急に小さくなる。

「とにかく、百合亜は桜子にあまり吹き込まない！
仁衣菜は調子に乗らない・・・。わかった？」

「「・・・」」

「わかったの！？」

「「は、はいっ！」」

そんな４人の姿を見てクラスメイトは声を漏らす。

「いつも、東城さんと仁衣菜が喧嘩するのに・・・
話しが合うときってあるんだね・・・」

「ほーんと・・・」

「それにしても、桜子って恋に臆病・・・」

「まだ言うか、あんたら2人は！！」

「い、いや、滅相もない！！

でも・・・恋ってなんだろうね・・・・」

「ほんと、難しい・・・・」

Ｔｈｒｅｅ～恋ってなあに？（後書き）

次回もよろです！

Ｆｏｕｒ～恋する乙女☆

「どうしたの？百合亜ちゃん。
機嫌がとてもいいのね。何かあったの？」
「桜子！えっとね・・・ふふっ実は・・・」

「えぇ！？好きな男の子ができた！？」

「しーっ！声が大きい！！」

「あ、ごめんなさい・・・」

「ふふっ、すっごくカッコイイの。
私を慰めてくれたんだから♪」

「もしかして、前の事件の？」

「・・・お母様が死んだのはとっても悲しい・・・
でも、お母様が呼んでくれた私の運命の相手なの！」

「そっか・・・」

桜子は柔らかく微笑んだ。

「へ～。百合亜が初恋ねぇ。」

「真琴！！」

「いいこと聞いちゃった♪」

「仁衣菜！・・・バラしたらただじゃおかないわよ・・・」

「バ、バラさないって・・・大丈夫！」

「安心できないっ」

「まぁまぁ。」

桜子がなだめる

「でも、百合亜の初恋だもん。
大事に、あたためなよ。
大切にしておけば、きっと、報われるから。」

「えぇっ！」

「・・・報われるって、真琴・・・おばさんくさい。」

「に～い～なぁ～！？」

「わぁー！ごめんなさーいっ！」

「こらー！まてー！！」

教室で走り回る真琴と仁衣菜。

その姿にクラスメイトは笑った。

Ｆｏｕｒ～恋する乙女☆（後書き）

初恋の相手は、言うまでもなく
新一です♪

Ｆｉｖｅ～中学生

時は流れて、中学生となった百合亜。

ますます綺麗になっていく百合亜と桜子は注目を浴び続ける。

「ずっと思ってたけど、あんたたち・・・
全然性格が違うのに、なんでそんなに仲が良いわけ？」

「そういや、あたしも思ってた。」

「ふふっ、あのね、私実は百合亜ちゃんが苦手だったんだ。」

「あら、私だって桜子が苦手だったわ。」

百合亜は丁寧な口調と親しい人たちに対する口調を
うまく使い分けていた。

「だって、百合亜ちゃんは先頭にたつような人で
私は影みたいな存在だったし・・・
最初はなんだろう、この人は。って思ってた。」

「私も・・・おとなしくて何考えてるのかわかんなくて
絶対仲良くできないって思ってた。」

「「でも・・・」」

2人の声が重なる。

「あの日から私たちの関係は変わったの。」

「あの日？」

「そう。」

「確か・・・小学校2年生のときだったわ。
私も桜子もお金持ちで誰もよってこなくて・・・
でも、私はいっつも先頭になってみんなを引っ張ってて・・・」

「それに比べて私は人にやってもらわなきゃ
できない子で・・・」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

小学校2年生

「ほら、貴方たち！さっさと動かなきゃ
早く終わりませんわよ！」

「う〝〜東城さんこわ〜い・・・」

「私は百合亜！そう呼んでと何度言いましたの！？」

「でも、お母さんが・・・」

お金持ちだということでひいきされて育った百合亜。

だが、それで友達が今までできなかった。

「わかりましたわ。
私と貴方たちだけのときは百合亜と呼んで。
他の大人がいるときは苗字でかまいませんから！」

はりきって答える。

クラスメイトもそれで承諾した。

「でも・・・南さんにはさすがに・・・」

「うん、お嬢様って感じだもんね。
まさに・・・」

クラスメイトがもらした言葉に百合亜は桜子に興味をもつようになる。

容姿はそれこそ西洋人形みたいなのに、名前は桜子という和風。

自分は容姿は和風で名前は洋風・・・

そんな正反対な自分たち。

「桜子ちゃん。」

「え・・・？」

「あたし、百合亜といいますの。」

「わ、私は南桜子・・・」

「知ってますわ。
ねぇ、貴方と私・・・名前を取り替えたら見た目とぴったり一致
すると思わない？」

「と、とりかえ・・・？」

「そう。百合亜ってあなたの容姿にぴったりだと私、思うの。」

「うん・・・あなたが桜子だったらすごく似合ってるかもしれない・・・」

2人は笑う。

そう、これが2人の友情の始まりだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「っていうことだったの。」

「あのとき、話しかけてもらってすごく嬉しかったんだ。
私・・・百合亜ちゃん、ありがとうね。」

そういって桜子は、はにかんだ。

Ｆｉｖｅ～中学生（後書き）

友情話しです～（ー▽ー）／～～

Ｓｉｘ～告白の日々

「俺、東城さんが好きなんだ。」

「僕・・・ずっと南さんが好きで・・・」

「まぁた・・・」

「今日で何回目？」

「４回目。でも、百合亜はまだいいよ・・・」

「私、心に決めたお方がいますの。
その人以外、嫁ぐつもりはございませんから。」

「・・・とかはっきり言えるもんねぇ。」

「でも、桜子はどうよ・・・」

「えっと・・・その・・・
ご、ごめんなさい・・・！！」

「謙虚だからさぁ・・・
ほんと、正反対の２人・・・。」

真琴と仁衣菜はため息を漏らした。

「百合亜もいい加減、あの男はやめたら？」

「あの男って・・・新一君のことですの？」

「そうよ・・・連絡先もわからない、会ってない・・・
きっと、相手には好きな人の1人や2人、できてるんじゃない？」

「そんなことないわ！
私のプロポーズを受けたもの！」

「そもそも、プロポーズってなによ・・・
小5の約束なんてはかないものなのよ？
それをわかってるの？」

「わかってる・・」

「嘘おっしゃい。
百合亜は昔からそうなの、ちゃんと現実をみなきゃ。」

「それでも好きなの、しょうがないでしょう!?」

「・・・百合亜・・・」

涙をいっぱいにためた顔を見せた。

「それに、真琴には恋する乙女の気持ちがわからないのよっ」

そして、すぐに泣き止み、口を尖らせて言った。

「な、なんですってぇー!?百合亜ー!!!!!!」

「真琴、怒りっぽいですわよ。」

「ゆ〜り〜あ〜!!!」

Ｓｉｘ～告白の日々（後書き）

そろそろ終わりたいですねぇ。

Ｓｅｖｅｎ～高校生（前書き）

あっという間ですが
ご了承ください＾＾；

Ｓｅｖｅｎ～高校生

「華の女子高生だぁー！！」

「仁衣菜ってば・・・」

「でもさ、米花女子って私服でしょ？
高校生になったー！って実感がわかないんだよね。」

「そうよね・・・」

「まぁ、いいじゃないっ！
これはこれでいいと思うけど？」

「ぶーっ」

仁衣菜は頬を膨らませた。

「で？百合亜はまぁだ工藤君が好きなわけ？」

「まだって何よっ」

「まあまあ。
百合亜ちゃんも一途なんだし・・・」

いつものように桜子はなだめる。

「あ、そういや桜子！
あなたの書がすごいことになって！」

「そうそう！総理大臣に褒めてもらったほどでしょ！？」

「確か、ドラマの題名も書くって言ってたわよね。」

そう、桜子の書を気に入った総理。

そしてある脚本家。

が桜子を褒め称えたのだ。

「華道もすごいし・・・桜子ってやっぱなんでもできちゃうんだよね。
器用だし。」

「そ、そんな・・・」

「かわいくて優しくてなんでもできて・・・
言うことなしよ、あんた！！」

真琴が桜子の背中を軽くたたいた。

「ね、百合亜！」

「え？あ・・・うん。」

「確か百合亜もコンテストに応募したんでしょ？
百合亜も記念館にのってるんだってね。
書！」

「まあ・・・」

百合亜も書道を習っていた。

共に、書道、華道、茶道、弓道を百合亜と桜子は習っていた。

だが、桜子のほうがなんでも器用にこなし、

百合亜よりも良い成績をおさめていた。

「そういや、先生が言ってたけど、
今度の大事なお茶会、桜子に点ててもらいたいって。」

「「え？」」

同時に百合亜と桜子が声をあげた。

「桜子って茶道も器用にこなすじゃない？
それに、茶道の先生が桜子さんの立てるお茶は最高って
言ってたらしくて。」

「それで、桜子に大事なお茶会を頼むって言ってたよ？」

桜子は嬉しそうな顔で笑い、百合亜は複雑そうに笑った。

Ｓｅｖｅｎ～高校生（後書き）

次回もよろしくですー！

Ｅｉｇｈｔ～コンプレックス

「百合亜、あんたさぁ・・・
コンプレックスとか、ないわけ？」

「え・・・？」

真琴の疑問に百合亜は困ったように笑った。

「だから、いっつもあんた、自身満々じゃん？
コンプレックスとかないわけぇ？」

「そういうこと。」

「うん。」

「・・・私にだってコンプレックスくらいあるわ。
それは、とても超えられない壁で
私は多分、一生かかっても乗り越えられない。」

人差し指で机をつつく。

「大好きなのに、うっとおしいと思ってしまう。
あこがれてるのに、邪険してしまう。
思っていることとは裏腹に邪悪な私の心は渦巻くの。
どうしたらいいと思う？真琴。
あなたなら、どうしますの？」

「・・・」

「可愛い、可愛いと育てられて・・・
私は名に不自由なく暮らしてきた。
それが当たり前で、大人の前では良い子ぶりっ子して・・・
ですわとか使い分けて・・・
なんのために、私は生きているのか、わからなくなってる。
いっそ、仁衣菜みたいな生き方がしたい。」

再び人差し指で机をつついた。

「・・・何をコンプレックスに思っているかわからないけど・・・
人は絶対超えられない壁なんて無い。
壁を超えて、そして、自分もまた誰かに超えられる。
そうして人と人は成長して・・・
だからね、百合亜・・・あなたは絶対その壁を超えられるよ。
弱気にならないで、がんばって。」

初めてみた真琴の真剣なまなざし。

「百合亜・・・あんたはね、一途に思いすぎると突っ走る
危なっかしいところもあれば
自分が正しいと思うとその意志を絶対に曲げないっていう頑固な
ところもある。
それが東城百合亜だってわかってる。
でも、少しは心をやわらかくして・・・
自分がただしと思っても、相手のためにならないことは
たくさん、あるから・・・」

そういうと真琴は百合亜の頭をポンポンとたたいた。

「真琴・・・」

「あんたに必要なのは、心を広くもつこと。かな?」

百合亜のコンプレックスは桜子だと知らない真琴は

それだけを残して去っていった。

Ｅｉｇｈｔ～コンプレックス（後書き）

次回もよろしくですぅＬ＜＜

Ｎｉｎｅ～大ッ嫌い！

「ね、南さんって本当、すごいよね！！」

「私、今のうちにサイン貰っておこうかな。」

朝からにぎやかだった。

桜子がかいた書のドラマが大人気になったのだ。

一気に桜子は人気になったのだ。

「ほーんと、桜子はすごいよねぇ。」

「あたしたちもサイン、もらっとく？」

真琴と仁衣菜は声をもらした。

「どうする？ゆーりあ♪」

「え？あ・・・そう。」

「どうかした？」

「別に・・・どうもいないわよ？」

明らかにおかしい百合亜に真琴は心底心配そうに顔をのぞいた。

「何かあったら言うんだよ。」

「うん。」

「桜子ちゃん！」

「南さん！」

「南ちゃんっ」

「桜子！」

教室では桜子を呼ぶ声が絶えない。

真琴と仁衣菜はおろか、百合亜すら桜子に近づけないくらい

桜子の周りには人が集まっている。

「だんだんイラつくわね。」

「ほーんと、驚き桃の木林檎の木・・・いえなくなってきた。」

「そりゃあ、重症ね仁衣菜。」

「でしょ？」

百合亜は一言もしゃべらない。

「ねぇ、本当にどうかした？」

「え？」

「元気がないわよ。」

「な、なんでもないから・・・」

「そう見えないから言ってるのよ。」

「本当になんでもないのっ！」

百合亜が大声をだすと、さっきまでにぎわっていた教室がいっせいにシーンとなる。

「百合・・・亜ちゃん？」

その状況に耐えられなくなった百合亜は教室を飛び出した。

「百合亜ちゃん！！」

桜子も続いて教室を出る。

「待って、まって！百合亜ちゃん！！」

「・・・」

「お願い、待ってよ！！」

今までに聞いたことのない桜子の大きな声。

一瞬、びっくりする百合亜。

それでも走り続けた。

＊＊＊＊＊＊＊＊

「どうして、どうして逃げるの！？」

「来ないでよ、桜子・・・」

「え？」

「なんでくるの！？」

「なんでって、友達だもん。」

「友達？笑わせないで・・・
どうせ、私のことを心の中で見下してるんでしょ？」

「みくだ・・・？」

百合亜は涙をためて桜子を見た。

「笑ってるんでしょ？私を！！
どうせ、私は桜子みたいになんでも器用にできない。
それでもがんばってきた！
バカにされる覚えは無い！！」

「私、百合亜ちゃんのことバカになんてしてないよ！」

「信じられないわよ！！」

「ゆ・・・りあちゃん・・・」

「桜子なんか・・・桜子なんか・・・
だいっきらい！」

そう言って再び百合亜は走っていった。

Ｎｉｎｅ～大ッ嫌い！（後書き）

とうとう言ってしまった・・・！

Ｔｅｎ～桜子から

「桜子に言いすぎちゃったかしら・・・
桜子は悪くないものね・・・ちゃんと謝らなきゃ・・・。」

「あ、百合亜！！おっはよーさんっ☆」

「おはよう、仁衣菜。
相変わらずテンションが高いわね。
暑苦しくてよ。」

「なによ～、百合亜だって、大人の前でぶりっ子しちゃってさぁ
見てて見苦しくてよ。」

仁衣菜は百合亜の口調を真似していった。

「に～い～な！！」

「わぁ、怒ったら更に見苦しくてよ、百合亜！！」

「その言い方が暑苦しいって言ってるのよ！！」

「暑苦しいって余計なお世話だぁ！！」

「なによ〜！！！！」

「ストーップ！！」

2人の間に真琴が割り込んだ。

「ちょっと、2人で何やってるわけ？」

仁衣菜

「「だって　　が！！」」

百合亜

「だってじゃないでしょ？まったくもー。」

「なによ、真琴だって仁衣菜と喧嘩してるくせに。
私にばっかり言わないでほしいわ。」

「私にばっかりって、あたしだって言われてるんだからね。」

「あー！！！喧嘩するなぁ！！！
あんたたち、暑苦しいのよ、喧嘩、喧嘩、喧嘩・・・！
あんたらは仲良くできんのかぁーーー！」

「「・・・」」

「い、いやですわ、真琴。
ほんの冗談じゃありませんの・・・」

「そ、そうだよ・・本気で怒らないでよ・・・
ね？ま、真琴・・・」

2人を見た真琴は目がすわっていた。

「「ま、真琴・・・？」」

「お前ら・・・さっさと教室に行かんと・・・しばくど・・」

「「ま、真琴が壊れた・・・」」

「ほら、お前ら！何グズグズしてんだ！
さっさと教室に行くゆうとんのがわからんのか！」

「「は、はい！！」」

「あれ？何か入ってる。」

「あ、あたしにもだ。」

「え？何が？」

「ま、真琴、正気に戻ったの？」

「正気って？あたし、さっきまで校門にいたのに
いつの間にここへ来たんだろ・・・
２人の怒ったトコまでは覚えてるんだけど・・・」

真琴は「う～ん」と考え込む。

百合亜と仁衣菜は後ろを向いた。

「今日の教訓。真琴は怒らせるな。」

「そのとおり。」

「何してるの！？」

「「ひっ」」

「な、なんでもありませんわ。」

「そうそう。」

百合亜と仁衣菜は冷や汗をかいた。

「で？何が入ってたの？」

「あぁ。手紙じゃないかな。」

「手紙？」

真琴にも入っていたらしく、3人はいっせいに取り出した。

「百合亜ちゃんへ。」

「真琴ちゃんへ。」

「仁衣菜ちゃんへ。」

「「「なにこれ？」」」

「桜子から・・・・」

「えっ！？」

Ｔｅｎ～桜子から（後書き）

手紙はどんな内容だったのでしょうか！？

Ｅｌｅｖｅｎ～遺書

「百合亜、あんたの読んで。」

「え？あ・・・うん。」

百合亜は読みはじめた。

「『百合亜ちゃんへ。
手紙なんか書いてごめんなさい。
本当は口で言わなきゃいけないこと、わかってます。
ですが、許してください。

私は、百合亜ちゃんを沢山傷つけてしまいました。
ごめんなさい。
でも、悪気はなかったの。
本当なの。ごめんなさい。
私が生きていることで、百合亜ちゃんを傷つけていること、
私は気づきました。
百合亜ちゃんにとって、私は邪魔者以外の何者でもないこと
よくわかりました。
百合亜ちゃんを親友だと思っていたのは、私だけだと
知りました。
私みたいな生きる価値のない人間

百合亜ちゃんの傍に少しでも居れたこと
それは、私のとって大切な宝物です。
私に向けていた百合亜ちゃんの笑顔は嘘じゃないと
それだけは信じています。
今まで傍に居てくれてありがとう。
百合亜ちゃん、本当にありがとう。

桜子より』」

「どういう意味？」

「手紙を残して・・・」

「じゃあ、次。
真琴が読んで？」

「うん。」

真琴が手紙を開く。

「『真琴ちゃんへ。
私にとって真琴ちゃんはおねえちゃんみたいな
存在でした。
頭がよくて、リーダーシップがあって。
みんなを引っ張るお姉ちゃんみたいな人でした。
私は、そんな真琴ちゃんにあこがれてました。
こんな人になりたいって、

ずっと思ってました。
だから、友達になれたこと、すごく嬉しかった。
私なんかと友達になってくれて、ありがとう。
再来月の合唱コンクール。
真琴ちゃん、指揮者に立候補するんだったよね？
絶対できるよ！
だって、真琴ちゃんには引っ張っていく力があるんだもん。
それに、生徒会長にもなるんでしょ？
すごいよね、私にはできないことばかり。
これからも応援してます。がんばってね。

桜子より『」

「これからもって・・・
ずっと一緒に居られないってこと？」

「つ、次！！仁衣菜！！」

「あいよ！！」

仁衣菜は手紙を出した。

「『仁衣菜ちゃんへ。
仁衣菜ちゃんは、明るくてクラスのムードメーカー的存在だったのよね。
そんな仁衣菜ちゃんは私の目標でした。

おとなしい私には正反対の仁衣菜ちゃん。
そんな私に真琴ちゃんと話しかけてくれた。
私は一生忘れません。

仁衣菜ちゃん、来週の女子体育大会に代表として
出るって言ってたよね？
すごいなぁ、仁衣菜ちゃんは。
どんくさい私とは全然違うんだもん。
運動神経抜群だもんね、仁衣菜ちゃんは。
驚き、桃の木、林檎の木、私は仁衣菜ちゃんのこの言葉・・・
大好きでした。

桜子『」

「でしたって・・・」

「なんか、手紙って言うより、遺書？」

「遺書って・・・まさか・・・」

「リリー、真琴、仁衣菜！！」

「ど、どうしたの！？」

「さっき、職員室で聞いちゃったんだけど・・・
桜子、首をつって自殺したって！」

「「「えっ！？」」」

「病院にいったけど、手遅れらしいよ・・・
今、病院に居る！」

「ありがとう、美鈴！」

3人は走っていった。

Ｅｌｅｖｅｎ～遺書（後書き）

桜子ちゃ～ん・・・

Ｔｗｅｌｖｅ～理由

「おじ様、おば様！！」

「百合亜ちゃん・・・」

「桜子は、大丈夫なんですの！？」

無言で桜子の母は首を振った。

ハンカチで涙を拭きながら。

「そ、そんな・・・」

「どうして、どうして桜子は自殺を・・・」

「私たちの責任だ・・・」

桜この父はグッとこぶしを握った。

「え？」

「桜子は私たちの離婚を知っていた。」

「離婚？」

「桜子を追い詰めてしまったのよぉ！！」

「そんな、桜子は私たちにそんな弱音、一言も・・・」

「優しい子だったから・・・
きっと、迷惑をかけたくなかったのだろう。」

真琴も仁衣菜も涙を流す。

（違う・・・桜子を徹底的に追い詰めたのは私・・・
精神が不安な桜子を私は知らずに・・・あんなひどいことを
言ってしまったのよ。
ずるい・・・ずるいわ、桜子・・・
どうして私に謝らせてくれなかったのよ。
そうしたら、そうしたら・・・
桜子、あなたは私をしばりつけたのね・・・
満足？ねぇ、満足？）

「百合亜・・・？」

「目を開けて・・・
お願い、目を開けてよ・・・桜子。」

「百合亜っ」

百合亜は目を閉じている桜子にしがみついた。

「お願い、殴ってもいい、詰ってもいい。
どんなことでもするから、目を開けてよ！！
開けなさいよ！桜子！！」

「百合亜、百合亜！
いい加減にして、桜子は死んだの、死んでしまったの！」

「桜子、桜子！」

「百合亜！！」

「百合亜ちゃん・・・ありがとう、桜子は百合亜ちゃんに
そこまで思われて幸せ者ね。」

「え？」

「桜子はね、口を開けば3人のことばかり・・・・
きっと、大切な友達だったのね。」

悲しい顔で、ひっしに涙をこらえて笑う
桜子の母に3人は言葉を失った。

（そっか・・・悲しいのはみんな一緒・・・
一番苦しんでいたのも、桜子・・・
追い詰めたのは私・・・）

Ｔｗｅｌｖｅ～理由（後書き）

そろそろ最終回ですかね？

Thirteen～END

「えっ！？百合亜、あんた転校するの？」

「えぇ。」

「どうして？」

「桜子が亡くなって私は絶望におちいった・・・
でも、桜子はきっと私を導いてくれている・・・
そう信じてる。
だから、愛するもののところへ、行こうと思っているの。」

「そう。
でもね、百合亜・・・あんたは自分が正しいと思ったら
突っ走るところがあるから、気をつけんのよ。」

「わかってる。」

そうして、３人は別れた。

『で？私にどうしろと？』

「愚痴を聞けばいいのよ。」

『その、毛利蘭って子がとりあえず嫌いなんでしょ？
だったら、はっきり言いなさいよ。』

「無理よ。だって新一君を盾にしてるもの。
何を言いつけられるかわかったもんじゃない。」

（桜子みたいな人だけど・・・
私は、ああいう人、見ててイライラする・・・

きっと、桜子と重ねているからだとわかっているけど・・・）

『あんた、自分が正しいと思ってる？』

「正しいとか、そうじゃなくて！
ただ、うざったいの、ああいう人！！
なんで新一君と一緒いるのかしら！」

『それは言いすぎよ。』

「だって。」

『だっても何も、しょうがないでしょ、幼馴染なんだから。
あ、そろそろ授業だから切るわよ。』

「あ、ちょっと、真琴！！
ちっでも仁衣菜に話してもまとまる話しもまとまらなし・・・
しょうがないか・・・」

「あ、東城さん、そろそろ授業始まるよ？」

蘭がやってきた。

「蘭さん。すみません。
すぐに戻りますわ。それより、新一君は？」

「また事件みたい。」

「そう・・・
あ、蘭さん。今日のお弁当はお寿司を入れたんですけど・・・
新一君はお好きかしら？」

「え？あ・・・大丈夫よ。
新一、お寿司は嫌いじゃないから。」

「はぁ、よかったですわぁ。
嫌いだったらどうしようかと思ってましたの。
東城家専属の板前に朝早くから作らせて正解でしたわ♪」

「朝早くから・・・」

「そうですわ。
だって、愛する人のためですもの。
当たり前でしょう？」

「そうだね・・・」

（桜子・・・あなたもこういうウジウジしたところ・・・
あったわね・・
本当の事いうと、貴方が羨ましかった。
きっと、私も彼女を羨ましいと思っているんだろう。
でもね、悪いことをしたとは思ってない。
私に協力すると決めたのは彼女だもの。）

「東城さん？」

「あ・・・ごめんなさい。」

（だから、確かにあなたを追い詰めて自殺させたのは
まぎれもなく、私・・・
でもね、自殺を決意したのは貴方・・・
だから、謝らないわ。桜子・・・
だけど、今度生まれ変わったときは・・・ずっと親友でいましょうね。）

そして、百合亜は蘭の隣に駆け寄る。

これからの悪夢を知らずに、蘭は百合亜と一緒に居た。

Ｔｈｉｒｔｅｅｎ～ＥＮＤ（後書き）

ＥＮＤです。

まぁ、今回のテーマは百合亜と桜子・・・
の友情といいますか
桜子の死の原因なんで、あんまり蘭も新一も出ませんでしたけど・・
・
見てくださって、ありがとうございました♪

桜桃

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6904u/

夢物語

2011年10月7日03時32分発行